

---

# 色世界

伊玖夜紗望

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

色世界

### 【Nコード】

N5587C

### 【作者名】

伊玖夜紗望

### 【あらすじ】

俺は高校一年生になり、初めての夏休み。異世界へと誘われてしまった。その世界は現実と変わらない世界だが、違う世界。そして、奇妙な職業をもった仲間達。その仲間たちと元の世界に戻るために、課題をクリアしていく……。

## 第0色 始まり

世界の事をどう思っているのだろうか？

揺るぎなく、そこに存在している。

そう思っているのだろうか？

ただ一つの確固たる存在だ、と思っているのだろうか？

信じているのだろうか？

もちろん、俺はそう思っていた。少なくとも、信じてはいた。

でも、それは、あまりにも外的外れな、正解に最もかけ離れた、解答だった。

この物語は、誰も知らない世界で、誰も知らない者たちが、誰にも知られる事なく、それぞれの想いを懸けた争いに巻き込まれた、

ある少女の話。

少女だけの物語。

だと思っていた。

でも違った。

観客席にいると思っていた。いや、観客席にすらいないと思って  
いた。完璧なまでに部外者だと思っていたのに。

俺はステージの上にいる。

役割まで与えられていた。

だからこの物語は、劇のように、

無駄など無く、

無意味など無く、

すべての存在に意味が有り、

すべての事柄に意味が有る、

そんな物語。

それでは始めようか。

物語を……。

事の始まりは、妹が熱を出した事にある。

その日は、高校に入ってから初めての夏休みの初日。

妹が熱を出した。

かなりの高熱だった。

両親は仕事で、夜にならないと帰ってこない。薬も無かった。

だが、ますます辛そうにする妹。

こうなれば仕方がない……。可愛い妹が苦しんでいるのだ。

俺が動くしかあるまい。

たとえ、気温が三十度を超える炎天下だろうと、薬局が近所に無く、三十分くらい行った所にしか無かるうと。

俺が行くしかあるまい（正直に言つと、行きたくはなかった。しかし、近所でも評判の可愛い妹が、涙目で、「お兄ちゃん、つらいよお」と、言ってきたら、もう行くしかないだろ）。

というわけで、俺は自転車に乗り、家から五分ほど行った場所に差し掛かっていた。

分かれ道。分岐点。

さて、どちらに行こうか。

片方は回り道。一般的な普通のコンクリート道路。

もう一方は近道。危険な道。通称ゴミ山と呼ばれる場所を横切る道だ。

小さな物はねじから、大きい物は車まで。それらが、山のようにいつ崩れてもおかしくないほどに、高く積み上げられている。

故に、このゴミ山は立ち入り禁止区域になっている。とはいっても、大半の人がここを往来している。だからそんなに深くは考えずに、いつも通りにゴミ山のほうへと向かった。

後でもう少し考えて、選べばよかった、と後悔するとも知らずに。

ここが本当に分岐点になるとは、思いもしなかったから

ゴミ山はかなり狭い道だ。慎重に運転しないと、ゴミに突っ込むことになってしまう。そんな事になりたくはないので、自然とスピードが遅くなる。

だからこそ気付けたのだろう。

ゴミに囲まれた中で立っている人影が。

誰だろうと思いつつも、誰だかは察しがついた。改めて後姿を見ると、それは確信へと変わった。間違ってるはずも無い。

幼馴染の葵月澪だ。

色世界

そして彼女の前には、ドアがあった。

何の支えも無く、立っていた。

何をしているのだろう。

何気なく、声をかけようと思ったが、漣が、異様なほど周りを警戒していて、話しかけにくい雰囲気があったので、ゴミに隠れて様子を窺うことにした。

やがて彼女は、ドアノブに手をかけた。

ドアが開く。

ドアの向こう側には、ゴミ景色が広がる。

彼女は深呼吸をして、ドアを潜った。

そして、

姿が消えた。

影も消えた。

形も消えた。

存在が 消えた。

な、はあー!?

意味が分からない。

どういうわけ?

消えたって、消えるって どういう事?

漣が、人が一人消えるって、何?

瞬間移動? 某漫画みたいに? 額に指当てて、気探って?

……ありえん。

絶対有り得ん!

ドアに何かあるのかと思い、ドアに近付きいろいろ調べてみたが、何も無かった。反対側にはもちろんゴミだけ。

………どういう事だ?

試しに漣と同じ行動を試してみる。

ドアの前に立つ　変化なし。

ドアノブに手をかける　変化なし。

ドアを開ける　変化なし。

ドアの向こうは、ゴミの山。

あとは潜るだけなのだが、何だろう？　体が強張る。ドアを潜る

ことを拒否する。あと一歩がない……。根が張ったように、体が

……。動かない。むしろ、ドアから離れようとしている。本能が、行

くな、と呼びかける。

だが無理やり、振り切るように、足を踏み出す。そして、

ドアを　潜る。

途端に景色が歪む。

宇宙に放り出されたかのように、体が宙に浮く。

今、どの方向に向いているのだろうか？　……。わからない。

上下前後左右があやふやになる。

頭の中がかき混ぜられているかのように、気分が悪くなる。

……。

……吐きそう。いや、吐く！　このままだと確実に吐く！

ううー……もう無理だ……限界に近い……。

……はっ！

……吐ける……。今なら、吐けるっ！

そう思った時、体が安定してきた。

景色も元に戻ろうとしている。景色は明らかにゴミ山の景色では

なくなっている。

そして思う。

妹のために薬を買って帰らなければ、と。

人間という生き物は、不可解な事態に遭遇すると、冷静になり、  
日常的事を思い出し、今起こっている事態から目を背けたくな

るものである。

格好良く言ってみただけ、要するに、冷静になるという名目での現実逃避である。こんな不可解な事態をすんなりと受け入れられるほど、俺は人間ができていないんでね。

第0色 始まり（後書き）

初めまして。楽しんでいただけましたか。続きも読んでいただけましたら幸いです。

## 第1色 迷える子羊【幼馴染】

景色が落ち着く。

足が地面を感じる。

体が風を感じる。

頭の揺れが治まる。

ふうー、と大きく息を吐いて、深呼吸をする。そして、周りを見回す。

幾本かの木が植えられ、四角い建物がいくつも建っており、綺麗に立ち並んでいる。建物にはそれぞれ、等間隔に窓が付いており、すべての建物が、二階部分が通路で繋がっている。前方には、バスケットなどがあるグラウンドを見渡すことができる。

ここは……俺が通っている高校ではないか！

という大げさなりアクションは取らず、普通に、高校か、ぐらいにしか思わなかった。

なぜここにいるのだろうか？ まあいいか。知っている場所にいるのだ。気にするほどの事ではない。でも、ラッキーかも。あのドアを潜れば、ここに行くことができる。それがわかれば、これからは朝はもう少しゆっくりと寝れるかもな。今夏休み中だから、学校に来ることないけど……。ああ、そうだ、早く薬を買って帰らないと、薬局は学校の近くにあったはず……。ああっ！ 自転車置いたままだ……。どうしよ……。先に自転車だな。盗られても嫌だし。とりあえず、さっきのドアを……。

後ろを振り向くと、そこには何も無かった。

ええっー！？ 無くなってる……。

……。

……仕方ない。ここからだとかかなり時間がかかってしまっが、道もわかるし。……歩くか。とりあえず校門に……。

そう思い、校門に行くことにした。

校門には一人の女子高生がいた。ここの制服。人待ち顔で立っていた。時折、辺りを見渡している。

澪だった。

今度こそ声をかける。

「よお」

「えっ……」

澪がこっちを見る。

小顔に整った鼻、薄い唇、くつきりとした二重瞼に、少し吊上った、吸い込まれそうなくらいに綺麗で大きな瞳。

そんな綺麗な顔が、一気に驚きに満ちてゆく。

そして次の瞬間、耳を劈くような声で叫んだ。

「えっ、なんで!? なんで、まーちゃんがいるのっ!? どういう事!? なんでなんでなんで!?!」

明らかに混乱している。ちなみに、まーちゃんっていうのは俺の事。三歳くらいの時の呼び方を、高一でされるのは少し恥ずかしいが、今や、その呼び名で、高校の友達からも呼ばれている。別に構わないが、澪にだけは呼ばれたくはなかった。

見栄だと思っが。

虚勢だと思っが。

もう子供じゃない、って言いたいだけなんだろうな……きつと……。こんなこと思ってる時点で子供<sup>ガキ</sup>なのに……

閑話休題。

澪は未だに混乱していた。えっ……何で……、をひたすら繰り返して呟いている。こんなに慌てている澪を見るのは初めてだったので、見ていて面白かった。中学まではずっと一緒にいたのに、なんか新鮮だ。

……もう少し見ていたかったが、そろそろ本題に入らないと。

「とりあえず落ち着けて。俺だっている聞きたい事があるんだよ。先に聞いていいか？」

「……………。えっ、あっ、うん。……………どうぞ」  
まだ混乱状態みたいだ。

「それじゃあ、まず最初。ここは  どこなんだ？  いくら夏休みだからといって、静かすぎる。あまりにも静かすぎる。部活とかやってるはずなのに……………。一体、ここはどこなんだ？  知ってるはずなのに知らない場所みたいだ」

そう、ここは二人だけを残してすべてが消えてしまったみたいは何の気配も無い。

「えっと……………ごめん。私もよくわからない。  あっ、でもこれから来る仲間なら知ってるかもしれない。『歩く辞書』って呼ばれるんだよ」

歩く辞書？  何の事だ？

「そうだ！  まーちゃんのも見せてよ。私はね……………」

そう言いつつ、鞆から、何やら手の平サイズの薄い長方形のカードのような物を取り出す。そして、俺に突き付ける。

「学生なのだ！！」

堂々と、胸を張って、誇らしげに彼女は言う。

……………。

そんな当たり前の事言われてもリアクションに困るのだが……………。

「違う！  カードを見て！」

突き出されたカードを見てみる。そこには、

|    |       |
|----|-------|
| 名前 | 葵月  漣 |
| 職業 | 学生    |

と書かれていた。

……………なんだこれ？

「まーちゃんのも見せてよ」

「その前にそれ……何？」

「えっ？ これ持つてるでしょ？ じゃないとここに来れないもの  
通行証みたいなものか。だとすると、俺は 。

「……あー、持っていない」

「えー、嘘だー。それじゃあ、あのドア開かないよ。恥ずかしがら  
ずに見せてよ。……えっ、本当に無いの？ 全く？ えっー！？  
じゃあ、どうやって開けたの？ 開くはずないんだよ。どうして！  
？」

「知らん。漣はどうやって手に入れたんだ？」

「ゴミ山に落ちてた」

「ふーん。それなら、俺のも落ちてるかもな」

「そうだよ。きつとあるよ。仲間が来たら探しに行こうね」

「……ああ」

仲間……。そういう存在がいるという事は、漣は何度もここに…  
…。

「なあ、漣。お前ここに来たの、何回 」

「それよりさ」

露骨に話題を変えられる。……話したくないのだろう。別にいい。  
人は皆、人には言いたくない秘密を持っているものだ。俺にもある。  
そしてそれを、親しい人間には明かさなければいけない、なんてル  
ールはどこにも無い。

「何？」

「この制服、可愛いでしょ？」

俺の前で、くるっと一回転し、俺にニコッと笑いかけながら聞  
いてくる。その仕草に俺は、ドキッとした。思わず、目を伏せる。  
「馬鹿な事言ってるじゃねーよ」

悪態をつくことしかできなかった。

「似合っていないかな？」

「いや……って、なんでお前がそれ着てんの？ 学校違うじゃん」

澪は有名な超難関進学校に行ったはずだ。この学校の制服なんて持ってるはずがない。コスプレマニア？ まさか、そんな秘密を抱いていたとは！ 嫌いじゃないけど！ むしろ好きだけど！ 何言ってるんだろっ……俺……。

「……いや、人の趣味をとやかく言わないが、女子高生が女子高生の真似をするっていうのは、どうかと思うが……せめてナースとか……」

なんか暴走しているぞ、俺。幼馴染相手に何を要求しているんだ。………？ 何言ってるの、まーちゃん？ 大丈夫？」

「えっ？ ああ、気にしないでくれ」

どうやら、コスプレマニアではなかったらしい……。別に残念だとか思っていないよ？ 本当ですよ？ 本当ですってば！！

改めて澪を見る。

高校を卒業してから四ヶ月。

長かったようで短かった四ヶ月。短かったようで長かった四ヶ月。

澪は綺麗になった。

昔から可愛かったと思う。周りの奴等が言っていたから。正直俺は、近すぎてよくわからなかったけど……。

長かったようで短かった四ヶ月。短かったようで長かった四ヶ月。

中学卒業してからの四ヶ月。澪に会う機会が無かった四ヶ月。

その期間で澪は変わった。少女から女性になろうとしている。…

…まだまだ少女だろうけど。それでも確実に……。

その間、俺は何をしていたのだろう。成長もせず、退化もするこ  
となく、ただ停まっていたと思う。

停滞。静止。停止。

自分が情けない。この四ヶ月。本当に自分はこの時間を通過してきたのか、と思ってしまう。澪と同じだけの時間を過ごしてきたのか？ 自分だけの時間は止まっていたのではないか？ そう思ってしまう。そう思わされてしまうほど。

澪は綺麗になった。

「まーちゃん」

不意に声をかけられる。じつと見ていたのを悟られたか？

「まーちゃん　大きくなったね。小学校じゃ私より小さくて、中学校で同じくらいになって、今では、私が見上げないといけなくらい大きくなってる。時間って……経過しているんだね」

成長したんだね、と言ってくれた。俺も時間を歩んでいる事を肯定してくれた。素直に嬉しかった。誰にも聞こえないほどの小さな声で、ありがとう、と呟いてみた。

## 第2色 迷える子羊【仲間】

「そういえば、話し戻すけど、その仲間ってのは何人いるんだ？」「二人だよ。えっと、『歩く辞書』のざっくんでしょ。『委員長』のルミちゃん」

歩く辞書に委員長。

肩書きとして委員長はまだいいとして、歩く辞書って……いじめられてそうだ……。

「肩書きじゃないんだよ、まーちゃん。職業がそうなんだよ」

それなら余計におかしい事になる。委員長はまだいいとして、歩く辞書って……職業か？

「ざっくんは凄いんだよ。知らない事は無いんだから。過去の事から 未来の事まで。ありとあらゆるすべての事柄、事象を知っているんだよ」

未来の事まで知っているなら、それは最早、辞書ではなく、超能力者だろう。そんな未来の事まで書いてある辞書があるのならば、是非とも一冊手に入りたいものだ……。

「残念ながら、僕は超能力者ではありません。どこにも販売されていない、一冊の本です」

背後から声がした。

振り向くとそこには、スラリと背が高く、眼鏡がよく似合っている、男の俺から見ても格好いいと思える、青年がいた。

「それに、未来の事知っているのではなく、現在ある情報から予想しているだけです。他人に僕の事を話すのなら言葉には気を付けて欲しいですね。葵月さん？」

トゲを含んだ言い方で、溇の事を睨みつける。

対する溇は、特に悪びれる様子もなく、「ごめんね、ざっくんと、謝っていた。」

その様子に、やれやれと、首を振っている眼鏡野郎。

なんか、微笑ましいというか……疎外感を感じる……。

「あつ、そうだ。まーちゃんを紹介するね」

「されなくても知ってますよ。貴方がまーちゃんさんでしたか」

『ちゃん』か『さん』どっちかにしろ。なんか、マール・チャンさんみたいな事になってるじゃねーか。俺は生粋の日本人だ。ていうか、なんで俺の事を知ってるんだ？ ストーカー？

「そうですね。では、僕はまーさんと、呼ばしていただきます。僕は、銚左かひろみ厦かといいます。葵月さんからは、ざつくんと呼ばれていますが……。職業は『歩く辞書』改め『走る辞書』です。以後、よろしく願います」

なんだ！？ 走る辞書って!？

歩く辞書は聞いた事がある。物知りって事だろ。しかし、走っているのは聞いた事が無い。意味不明だ。そもそも、辞書には走る必要は無いだろう？

いろんな疑問が俺の頭を過ってる最中に、漣が嬉しそうに銚に話しかけた。

「ざつくん、ランク上がったんだ！ いいなー。羨ましいよ」

「しかし、このネーミングセンスはどうかと思いますよ。ところで

まーさんの職業は何ですか？」

「俺はまだカードを持っていない。だから知らん」

「カードが無い？ それではどうやってここに……否、どうしてここに来れたのですか？」

「わからんよ、俺には。それを『歩く辞書』たるお前に聞こうと思っっていたんだから。ああ、今は走っているのか。……とにかく、俺は知らないし、わからない。ドアを潜ってきただけだから」

「どついう事だ？ そもそもカードが無ければドアは開かない……。一体どうして？ 待てよ……こうすると……否……しかし……でも……」

「ざつくんにもわからない事だったかな？」

「……………」

返事は無い……ただの考える人のようだ……。

「おい」

「……………」

返事は無い……ただの考える人のようだ……。

「……………」。はぁー、まただよ。ざつくん、ちよつとでもわからな  
い事があればすぐにこうなっちゃうんだ。ほつといたら元に戻っ  
てるけど……………」

下を向いてぶつぶつと呪詛を唱えているようなその様子は、ある  
一種の不気味さがあつた。ていうか、なんか目がイっちゃってますよ！  
「……………ふふふ……………くつくつく……………ふふふ……………」

鏝が突然笑い出した。

怖っ！

一体何なんだ、こいつ？ そんなに深く悩む事なのか？ 当の本  
人は全く気にしていないぞ。

……………なんか信用できない。一人の世界に入ったらと思つたら、突  
然笑い出す奴なんて誰も信用できないだろうけど。なんか胡散臭い  
……………。なんとなくだけど。眼鏡か、眼鏡が胡散臭いのか？

「それにしても、瑠御礼さん遅いですね。何かあつたのでしょうか  
？」

鏝は、普通に自分の世界から戻ってきた。そしてそれとほぼ同時  
に、校舎から走ってくる人影が現れた。

「ごめんなさい！ 待たせちゃいました。 あれ、こちらの方  
は？」

……………。

はっ！ 一瞬、反応が遅れてしまった。思わず、見蕩れてしまっ  
た。

だって、可愛いんだもん。

……………やばい。マジで可愛い……………。

くりつとした丸い、大きな瞳に……無理だ……言葉では言い表せない……。

何なんだこの方は？

同じ人類なのか？ ……いや、違う。違うに決まっている。

彼女は天使だ。

天使そのものだ！

「あの一……」

何の反応を見せない俺を、心配そうに見つめてくる。

その視線だけで倒れそう……。倒れてもいい……。

まさに、死線！

……すみません……。

「彼は私の幼馴染の、まーちゃんです。よろしくしてあげてね」

澪が俺の代わりに紹介してくれた。

「あなたがまー……」

突然言葉を詰まらせ、何かを考え始めた。考えている事はなんとなくわかる。

「なにで呼んでくれても構いませんよ」

特にあなたになら。

なんて言わないけど。

「そうですか。それでは……私は、まー君にします。どうも初めま

して。『委員長』の瑠御礼<sup>るみれにて</sup>爾圖<sup>に</sup>です。あなたがまー君だったの

ですか？ 驚きです」

「……そんなに俺は有名なのですか？ その錆左廬も知ってるみ

たいな言い方してましたし。そんな自覚無いですけど……」

「いえいえ。澪さんがずっとあなたの事をはな……」

「？」

言葉が途絶えたのには訳がある。何事にも原因というものはあるのだ。

この場合は、澪が後ろから口を塞いだから、である。

「もういいでしょ、ルミちゃん。早く行きましょう。今日は急がな

「きや」

「そういえば、今日は迷いの森でしたね。あそこは僕でも迷いますからね。時間がかかりそうです」

「それもあるのだけれど、もう一つあるの。まーちゃんのカードを探して欲しいの。多分、ゴミ山にあると思う」

「……………」

瑠御礼さんは、俺のカードが無いという事に、驚き、言葉を出せなかったみたいだ。

これで三者三様の驚き方を見せてもらった事になる。

絶叫。

崩壊。

硬直。

うーん…………面白い。

「……………。カードが…………無いつて、本当…………ですか？」

恐る恐るという感じに、彼女は尋ねてきた。

「ええ。本当ですよ。しかし、カードってそんなに大事な物なのですか？ そうとは思えないのですが？」

「まーちゃん、敬語だね。よくわかったね。ルミちゃんが年上だって。私はわかんなかったかな。凄いね、まーちゃん」

「あ、当たり前だろ！？」

なっ、なにー！？

この容姿で年上だとっ！？

妹と同じくらいだと思っていた…………。ちなみに妹は十三歳。

あと敬語なのは、彼女の雰囲気が軽々しく話しかけてはいけないような、なんとというか。つまり、あまりにも神々しい（特に外見）のだ。

敬すべき存在なのだ！

神様、ありがとう！

「なにしてるの？」

「いや、別に。生命の神秘について考えていただけだ」

漣は特に思う事もなく、「ふーん」と、言ったただけだった。

### 第3色 迷える子羊【説明】

「それで、カードってそんなに重要なのですか？」

「カードが無いと、元の世界に戻れませんよ？ あのカードは証明書のようなものです。まあ、いわゆるパスポートですね」

「なるほど。パスポートですか。ていうか、元の世界ってどういう事ですか？」

「やっぱりここは……。薄々気付いていたけど。」

「ええ。ここは、あなたがいた世界とは、少し違って……その……なんて言えはいいかな……。 銚さん、説明してもらってもいいですか？」

瑠御礼さんは、銚に助けを求めた。

「困った顔も可愛い……。」

「ええ、いいですよ」

よく似合う微笑みを浮かべ、俺の方を向き、「まず、元の世界についてですが」と、話し始めた。

「元の世界。元々貴方がいた世界の事ですが。その世界を創ったのは、誰だと思えますか？ 神？ 最初から存在している？ 中には、自分が創造主だ、という人もいますが、大抵の場合は嘘でしょうね。と、こんな風にいろんな説がありますが、神が創った、という説が一般的でしょうね。だから、元の世界というのは、神が創った物、と決めます。決定します。決め付けます。ではこの世界、つまり今、我々が今いるこの世界を創ったのは、創造したのは、一体誰でしょうか？ 神？ 最初から？ 否、この世界を創った者がいるのです。この世界の創造主。」

それは、

です。

「この世界は、色が創った物なのです  
色が世界を創った？」

「どういう事だ？　ますます頭が混乱しそうだ……。」

「……色、っていう人がいるのか？」

「違います。まさしく色なんです。colorと言えば分りますか？　C、O、L、O、R、です」

「……………。理解は……し難いが、創った目的は？」

「わかりません」

「じゃあ、俺等の存在意義は？」

「なぜここにいる？」

「どうしてここにいる？」

「どうやってここにいる？」

「わかりません。それでも答えが欲しいのなら　選ばれた、としか言いようがありませんね。実際、ここに来れるようになってから、様々な事をしてきました。宝探し、探索、目的地への到達。と、実に様々な事をしてきました。それでもよくわかりません。なぜここにいるのか。どうしてここにいるのか。解答の糸口すら見えてきません。推測することは可能ですが」

「その推測とやらを出来れば聞かせて欲しいね」

「推測というよりは憶測ですけどね。それでもいいのであれば、聞かせてあげましょう」

ふうー、と銚は一息吐き、言葉を繋げた。

「今から話す事は、決して事実ではなく、真実でもありませんので本気にしないでください。そこはお願いします。ただの憶測です。僕の拙い脳が導き出した、一つの仮定です。可能性です。可能性が1%にも満たない、可能性です。否、不可能性ともいいますか。とにかく、それを理解しておいてください。　それでは、そろそろ本題に入りましょうか。あまり焦らしても意味がありませんからね。　彼ら、つまり色達がこの世界を創った理由、目的は、おそ

「らく 観察です。我々を観察しているのだと思います。ところでこの世界のルールはご存じですか？ そうですか。まだですか。では、そこから説明しましょう。まず、この世界に来るには、呼ばれなければいけません。こちら側から一方的に行くことは出来ません。

貴方の場合は、かなりの例外だと思えますが。とりあえず、この世界に来ます。そして、こちら側で何をするかというところ、目的を達成するのです。所謂、依頼のような物があるのです。それは、ドアを通るときに聞こえてきたり、カードに書かれていたりするので。ああ、カードに書かれているのは、自分以外見えませんよ。そして、それを達成すると、元の世界に帰る事が出来るのです。これがこの世界です。この辺りで閑話休題。これらの事から、彼らの目的というのは、観察する事、という結論が出ます。つまり、我々が何か目的を達成しようとしているところを観察しているのだと、思います。問題に対してどうするか？ 問題と関係を持つてどうなるか？ そういう事を観察しているのだと思います。勿論、ただわからない事もあります。彼らが何を観たいのか？ 観察してその結果、何をするのか？ など、まだまだわからない問題はありますが、彼らが今現在したい事は、観察、だとこの銚左廬は推測します。否、憶測ですか」

「……よくわからん！」

正直なところ、「はあ、そうですか」と、しか言えない。全くもって、次元の違う話を聞かされた気分だ。　　って、ここは俺がいた場所とは違うのか……。

「……いいだろう。俺は自分で言うのもなんだが、なかなか心の広い人間だ。」

受け入れてやる。納得してやる。

さっさと帰りたいからな。……妹、大丈夫かな……。

……あつ。

「おい、銚。こつちの世界には人がいるのか？ 俺等以外にいるの

か？」

家族やクラスの奴等とか、いるのか？

「僕の事は錆ですか。いいですね。変に凝ってなく、ストレートで  
実に良い呼び方です。嬉しいですね」

「名前の呼び方なんてどうでもいい。早く答えろ！ いるのか、い  
ないのか、どっちなんだ！？」

「そんなに怒鳴らなくてもいいですよ。ただその質問は少し難しい  
のです。いる、と言えはいる。いない、と言えはいない。そういう  
類の問題なのです。言える事は、貴方が想像したような人々はいま  
せんよ」

いない？

いないのか？

それじゃあ、誰がいるんだ？

一体、誰が？

「うーん……そうですね。果たして、彼らを人と呼んで良いものか、  
悪いものか……。どちらでもいいのですが、僕はそういう事は  
気にしてしまう人間なもので。まあ、まだ会った事はありません  
んが、我々以外にもいるかもしれませんね。否、確実にいるでしょ  
うね。観察対象が」

俺等以外にも似たような境遇の奴がいる……。

当たり前だ。こんな小人数だけからデータを取っても、意味が無  
い。いや、価値が無い、と言った方がいいか。なんせ世界には、六  
十億もの人間がいるからな。

「六十六億人ですよ。六億人の差は大きいです。とは言っても、こ  
れも大まかな数字ではありますが、正確な数字ではありません。戸  
籍に登録されていない子供達などがいますからね。一体、これ  
からどうなってしまうのでしょうか？ これからも、戸籍の無い、  
居場所の無い、子供達が増えていくのでしょうか。そういう子供達  
は社会に出ても、満足な待遇を受けることができず、差別を受け、  
それらから来る反社会精神によって、犯罪を犯す者も出て来るので

はないのでしょうか。……一体、これから先、世界はどうなるのでしょうか？」

「知るかつ！」

「そんな話してねえ！」

「……いや、大変な問題だとは思っよ。だけど、今は考えてる暇が無い、と思うんですけど。」

「ああ、そうですね。すみません。ところで、貴方の目的は何ですか？」

「……知らない。わからない。何も……」

「……そうですね。それは困りましたね。もしかすると、貴方は帰れないかもしれませんね。……いわば、貴方は、不法侵入に近い形でこの世界に来たのですから」

「思った以上にやばい状況みたいだ。ここにきて、帰れない可能性が出てきた。」

「……とにかく、カードを手に入れましょう。そうすれば、何かがわかるかもしれません……」

「というわけで、俺達一同は、ゴミ山に行く事となった。」

「場面は変わり、ここは、迷いの森の入口である。」

「さて、それでは行きますか」

「と、先頭にいる、鎧が言った。」

「……不気味……ね……」

「こ……怖い……です……」

「その後ろには、女の子同士、腕を組みながら、逃げ腰で、漣と瑠御礼さんがいた。」

「はあー」

「そして更にその後ろ。俺がいた。気怠そうに、何度も溜め息を吐きながら、後についていく。」

「ポケットを探る。カードを取り出す。見る。」

「はあー……」



と、瑠御礼さん。

「ふっ。まあ、よかったじゃないですか。カードも見つかって。この職業も……ふっ。希少だと思いますよ」

と、鏝。

爆笑。

笑いを堪える。

鼻で笑う。

みんなに笑われた……そんな俺の職業は 言いたくない。というか、認めたくない。言わなきゃ駄目？ 絶対に？ ……よし。わかった。覚悟を決めよう…… 『羊』である。

……。  
羊って……。

## 第4色 迷いの森にて【雷】

……はぐれた……迷った……どうして？ なぜ周りには誰もいないのだ？ 俺は一番後ろにいたはずだ。それなのに、俺の前に誰もいないのはなぜだ？ どの辺りでいなくなった？ 確か、入ってから十分間はいたはずだ。それから

「次は右ですから、左ですね」

地図を手に、錆が意味不明な事をほざいた。右だから左に行く？ ……バカなのか？

その後ろを何の疑惑を抱く事なく、ついていく二人。漣と瑠御礼さんだった。

二人ともかなり怖がっていて、ちよつとした物音でも驚いていた。二人とも眼には涙を溜めていた。二人は震えながら、お互いを支えあっていた。

「次は左ですから、右ですね」

また意味不明な事をいう。

なるほど、地図とは逆の方向に行ってるのだな。確かに、あの地図は物凄く怪しい。森の入口にある看板に張り付けてあった物だから。そう簡単には信用しない、というわけか。

「次は右ですから……右ですね」

はあー？ なんで？ 右だったら左じゃないの？

「次は左ですから、右ですね」

また戻った。

「次は左ですから、左ですね」

……。……もう、無視しよ。やってられん。

そう思い、漣達と同じように景色観賞（二人は景色観賞なんて生易しい物ではなく、景色警戒だが）する事にしよう。

かなり薄暗く、時折、動物の声らしき物が聞こえ、草木がたまに、



で？ なにしてるの？ って、迷ってるんだっつーの。わははははははは」

なんだこいつ？

誰？

本当に誰？

……知ってる……わけないよな。

こんな完璧なまでに金髪の奴なんか見たことないし、背は低いし、肌は綺麗に日焼けしてるし、所々傷だらけだし。……誰？

「そうか、自己紹介がまだだったねえ。おいらは、くびきりらいじ鹹桐雷茲だ。職業は『雷神』だ。かつけーだろ？」

格好いい……。憧れる……。俺の羊とは雲泥の差だ。だって、神と動物だよ。雲に乗っかってる奴と雲のようにふかふかしてそんな奴だよ。いいなあ……。

「うん？ あんたの職業『羊』なんだ。てことは……あんたがまーちやんだな。すげーっ！偶然ってあるもんだな。おいらの日頃の行いが良かったのかな。なーんっつて。わははははははは」

なっ！ 俺の名前まで知っている！？ なんて事だ……。こんな知らない奴にも俺まーちゃん羊という恥ずかしい事を知られているとは！ 最悪だ……。俺は日頃の行いが悪いのだろうか……。

「そんなに落ち込むなよ、まーちゃん。気にしちゃダメだって。むしろ、『羊』っていうのは、すげーんだぜ。……いや、何がすげーのかは、よく知らないけど。とにかく、すげーんだ。だから誇るべきだ」

そんな言い方されて誇れるかつ！

「そっつえばおいら、まーちゃんに会いたかったんだ。けど、なんで会いたかったかが思い出せねえ。なんでだったけ？」

知るかつ！

「……ねー、何か喋ってよ。おいら……寂しい……じゃんかよー……。泣くよ？ おいら泣くよ？ 泣いたらすぐに、風兄が助けに来るよ……」

マジで涙を眼に溜めて、本当に泣きそうだった。てか、もう泣いてる？

「……ん、風兄？……何か思い出せそう……。あつ、そうだ！風兄が呼んで来いって。そうだった。よかった。思い出せた。というわけで、まーちゃん、おいらについてきてくれ」

「なんでだよっ！」

意味わかんねーよ！

それに小さい時に言われてるんだよ。知らない人にはついていかないように、ってな。

おいおい、一転して嬉しそうだな。そんなに嬉しそうな顔、見た事無いよ。俺が行く事、もしかして確定？もしかしなくても確定？

「なー、まーちゃん。早く行こうぜ。おいら、怒られちゃう。それに、向こうも待ちくたびれちゃうよ」

そう言いながら、俺の手を掴んでくる。

結局、行くしかないのか……。

……道に迷って行って行き先無かったから、別にいいけど。

「わかったよ、行くよ。とにかく手を放せ。……ったく。ついていけばいいんだろ？」

「今度ははぐれないようについてきてくれよ。はぐれたら、捜すのメンドーだからよ」

ぐあ！他人に言われると傷つく。もう忘れてくれ！そんな過去！……俺は、俺は、迷ってなんかいない！

「過去を反省し、改めてこそ、人間は成長できるんだぞ。まーちゃん」

……。いや、そうなんだけどさ……。なんか……。お前に言われるとさ……。なんか……。違うよつな……。

「何をっ！？おいらは日々成長を重ねているぞ！この間だって、驚くなよ……。なんと遂に、九九をマスターしたんだぞ！」



「やな……ふええーん！」

「……引く！ 怒られたという理由だけでここまで泣かれると引くぞ。子供かっ！？ もしかして、本当に小学生？」

「そんなわけ、ないだろっ！ うええーん！」

「あーあ、鼻水まで垂らしちゃって。ハンカチ持ってないしな！ どうしよ……。」

「うぐ……えぐ……うづ……えーん！」

「まだ泣くかっ！」

「どうしたらいい？ この状況を打破するには、一体どうすれば？」

「……あのな」

「恐る恐るという感じで、話しかけた。」

「もう泣くなつて。ほら、今度はちゃんといいていくからさ。泣くなつて。 あっ、でも、歩いて行こうな。そうすればさ、はぐれることも無いだろ？」

「う、うん……」

「ふっ……。やっと泣き止んだか……。」

「えへへ……、まーちゃんは優しいな」

「今度は一転して笑顔だった。」

「感情の入れ替わりが速い奴め。泣かれるよりはずっといいが……。」

「よし！ 今度こそ行くぞ。次は ついてこいよ」

「ついていくさ。走らなければな。」

「って、言ったのに……また……。」

第4色 迷いの森にて【雷】（後書き）

メッセージを頂きました。ありがとうございます。これからも、頑張っていくと思いますので、出来れば最後まで楽しんでください。

## 第5色 迷いの森にて【風】

結局、また戻ってきて、先程と同じような展開になり、そして、今は俺が手を引き、先導しているという状況だ。

……なぜ、案内される立場の俺が前を歩いているのだろうか？

ちなみに、雷茲は後ろでまだ泣いている。

「うっ……ぐすっ……うっ……ぐすっ……」

はぁ……。

「……なあ、雷茲。誰が俺を呼んでいるんだ？」

漣達だったりして。

それは無いだろうけど。

「ぐすっ……風、兄。が、呼んで、い、る」

「風兄？」

「う、うん。おいら達、クビキリキョウダイって呼ばれてる」

物騒な呼び名だ。

「その……兄貴に怒られたのか？」

「……うん」

怖そうなお兄様なこと。

「いや、でも風兄は凄いなぞ。何でも知ってるし、格好いいし、

優しいし、そして、何より強いからな。おいらは風兄の事を尊

敬している。だから風兄の事をそんな風に思っただけじゃない……」

自分の事のように、誇らしげに言う。

尊敬。

正直、羨ましいと思う。

俺にも、大事で可愛い妹がいるが、尊敬されているか、と言われると、そんな事は無いと思う。絶対に。

……少し落ち込む。

「それは悪かった……。で、次はどっちだ？」

「右だ」

「道は覚えているんだな……」

「ここはそこら辺の道ではない。迷いの森である。それなのに、九も覚えていない奴が……。」

「風兄が呼んでくれてるから。時折、風が吹いて来るだろう？」

「その先に風兄はいる」

確かに風が吹いている。常に吹いている。それも、正面から。いや、正確には、風が吹いて来る方向へと歩いている。

「お前は、道を覚えているのか？」

「あー！ お前って失礼なんだー！」

「わ、悪い……」

馬鹿に正論で怒られると、なんか、腹立つな……。

「可愛く、ライちゃん、って呼んでおくれ」

「却下！ てめーなんか、お前で十分だ！」

「いいから一回だけ。ライちゃんって呼んでよー。きっとわかるよ」

何がわかるんだよ！？

「風兄すら呼んでくれないんだよなあ。なんでだろう？」

可愛くは無いらだるう。不細工では無いけど、どっちかって言うと、ワイルド。凛々しい感じだからだろ。可愛いより格好いいからだろ。でも、一回くらいなら……。

「それで……ライ……ライちゃん？ 道は覚えているのか？」

「うあー！ 恥ずっ！ すごく恥ずかしい！」

「ん？ 何？」

聞いてなかったのかよっ！ 俺の決死の覚悟は一体……。

「はあ……。まあ、いい。それで、道は覚えているのか？」

「いいや、全く覚えてない。まーちゃん、ここは迷いの森だぞ。おいらがこの森を歩いたら、三步で迷える自信があるぞ！」

自信たっぷり言われても……。

「……それじゃあ、どうやって俺を探そうとしていたんだ？」

「勘」

「あっ……そう……」

なんかもう行き当たりばったりだな。

「？ おいらは、突当り右って感じで歩いてきたけど」

「……突当り右って？」

「突当りまで行って、そこを右に曲がるって決めて、歩き捜したって事。そうすれば、まーちゃんに会えると思っていただけから」

それって、同じ所をぐるぐる回っていただけじゃ……。

まあ、それで俺に会えたのだから、こいつの勘もあながち冗談ではないという事か……。

「もうすぐだぞ。風が強くなってきた」

確かに先程よりは強くなってきた。

風兄……なんかきつそうなイメージが……。

「大丈夫だよ。風兄は優しいから、いきなり取って食いはしない。だから、緊張しなくていいぞ」

お前の兄貴は優しくなければ、人をいきなり取って食うのか？

……ふう。正直、初対面の人と会うのは苦手だ。何を話せばいいかがわからない。基本的に俺は、無口で口下手だから。

雷茲が草を掻き分けて進む。俺も後に続く。

「着いたぞ。ここだ」

そこは 今までとは違っていた。

思わず、言葉を失った……。

光が溢れていた。天から降り注ぐ光。その中心に、人がいた。

黒く艶やかな長い髪に、豪華絢爛な着物。

美しい、と思った。

儂げも美しい瞳を、指先に止まっている鳥に向けている。

その手は、白く、長く、細く。今にも壊れそうで……。

美しい、と思った。

思わず、見蕩れてしまうほど……。

「風兄いー！」

雷茲は走りだした。その人に向って。自分の兄に向って……。

って、あれ男!?  
マジで!?

俺、男に見蕩れてた!?  
そんな! 詐欺だろ!?

……いや、きつと雷茲が間違っって呼んでるんだろ。兄と姉の呼び方を間違っってるんだろ。

そう思う。そう願う。そうであって欲しい。頼むから。

雷茲が走って来るのに気づいた彼女(ここでは望みを捨てずに、彼女、と呼ばしていただきたい)は、両手を広げ、雷茲を抱きしめるのかと思った瞬間、その勢いのまま、綺麗な一本背負いをきめたドゴーン! と、凄い音が辺りに響く。そして、彼女は口を開く。  
「遅いですよ、雷。待ちくたびれました」

その声は、美しく、まるで歌っているみたいで、心地よいテノールの響きだった……。

……ん、テノール?  
って事は、やっぱり……。

はあ……。もう少し夢を見ていたかった……。

「どうも、初めまして。雷茲の兄の風茲ふうじです。職業は『風神』です。会いたかったですよ、まーちゃん」

ニコツ、と笑いかけてくる。

こいつが男だとわかってても、ドキッ、ってしてしまう。

なぜ男なんだ!?! 神様は頭が狂っているのか? なんでだー!?

……いや、まだ男と確定したわけではない。声の低い女性かもしれない。聞いてみるか……。

「初めまして。ところで、あなたは女性ですか?」

「……女性? いえいえ、男ですよ」

やっぱりーっ! 望みが潰えた……。

ちくしょーっ! こんなに綺麗な人見た事無かったのに……。

「でも、なぜか皆さん、ぼくを女性に間違えるんですね。本人はそうは思わないんですけど……。どっちかって言うと、男っぽいイ

メージで日々を過ごしているんですが……」

「どこがだよっ！」

自分の顔見てみる！

綺麗だから！ 物凄く綺麗だから！

「はあ……。それで何の用ですか？ 道も覚えていない弟を捜しに行かせるなんて」

「弟？ ああ、なるほど。 雷。こちらにおいで」

投げ飛ばされた雷茲は、いつの間にか立ち直っていて、蝶を追いかけていた。

そんな雷茲を、手招きで呼び寄せる。

その仕草があまりにも優雅で、ドキッ、としてしまう。

「何？ 風兄？」

「そのまま 手を後ろにまわして そのまま。動いてはいけません」

弟を直立させた風茲は、次に俺の手を取り（もちろん、ドキドキした）、そのまま雷茲の胸に手を押し付けた。

ムニツ。

柔らかかった。

まさか……この……柔らかい感触って……。

「にゃあああー！」

雷茲は、凄いスピードで後ろに下がっていった。

そして顔を紅潮させて、

「まーちゃんのえっち……」

と、呟いた。

ま、まさか……こいつ……。

「ええ。雷は女ですよ。可愛い妹です」

なんですとー！

発育してなさすぎて、わからなかった……。

「……気にしているのに。何よりも気にしているのに」  
雷茲は泣きそうだった。てか、泣いていた。

「傷ついた……。おいらの乙女心は深く傷ついた……」  
「う、ごめんなさい?」

「何で疑問形なんだー! 謝れ! 全身全霊をかけて謝れ!」

「こらこら。落ち着きなさい、雷。まーちゃんも一応謝つといてください」

よく考えれば、原因はこの人なんだよな……。

でも、そんな事をこの美貌の前では言えない……。男だけど……。

「ごめんなさい」

「うん。許す」

軽っ!

「これで双方、仲良しですね。良かった」

なんか……騙された気が……。

「被害妄想ですよ、まーちゃん。それより、お話をしましょう。

その為にあなただを呼んできて貰ったんですから」

「そんな事ですか……。もっと重要な事かと……」

「重要です。雷。少し遊んできなさい」

「胸を大きくするにはどうすればいいんだろう?」

どうすれば……。そう呟きながら、蝶を追いかけ始めた。

蝶を追いかけても胸は大きくならないと思うが……。

「まずはお礼を言っておきます。雷が世話になりました。騒がしかったですでしょう?」

「……そうですね。でも、迷っていたんで助かりました。ありがとうございます」

「いえいえ、別に礼を言われる事ではありませんよ」

それからは、どうって事の無い会話を続けた。

髪を掻き揚げる仕草に、ドキッ、としたりしたが、それも次第に慣れていった。

かなりの時間が経過したと思う。

相変わらず、雷は蝶を追いかけているが。

「そういえば、まーちゃん」

「何ですか？」

「あなたは……漣と知り合いましたね？」

なぜ漣を知っているんだろう。

……そうか、あいつは、おそらく何度もこの世界に来ているからどこかで会ったことがあるのか。

「まあ、幼馴染ですから」

「どう思ってます？」

「？」

質問の意味が分からない。

「別に深い意味はありませんよ。今思っている事を言ってくだされ  
ば」

「……………」

風茲は次の言葉を待っているようだった。

「……大事だと思います」

「どのくらい？」

「それは……わかりません。でも……」

わからない……。

それは事実だ。

でも、大事だと思う。大切だと思う。

世界が漣の敵になったとしても、俺だけは……味方でいようと思  
う。

それくらい、大事で大切だ。

やっぱり、よくわからないけど……。

「そうですか……」

深く息を吐き、何かを決意したように立ち上がる。

「死んでもらいますよう」

「は？」

「まーちゃん、あなたには死んでもらいます」  
「なんで？」

どうして？

「ぼくも出来れば殺したくは無かったですけど……仕方が無い。零の  
味方をするというならば」

零……？

誰だそれは？

「雷っ！ いきますよっ！」

「はいよー！」

雷茲があのも物凄いスピードで突っ込んでくる。

「心に負った傷の分だけ殴ってやるー！」  
しっかりと根に持っていた。

って、そんなこと考えてる暇無え！

とにかく、避けないと……。

横に跳び退く。

後ろにあった岩が、粉々に砕け散る……。

ありえねー！ 避けて良かった……。

ふと、影が覆ってくる。

後ろに、何かが当たった衝撃。

「チエックメイト。終わりです」

手には煌くナイフ。

死んだと思った……。

なぜなら

腹から手が生えてきたから……。

その手は、ナイフを掴む。

それに驚いた風茲は、ナイフを手放し、後ろに退く。

「腕……う、う、う、腕が……生えてきたー！」

この状況に一番驚いているのは、俺だった。

なんじゃこりゃー！マジックかー！？

腕はナイフをポイッと捨て、更に伸びてきた。

やがて肩が出てきて、頭が出てきて、もう片方の腕が出てきて、

胴体が出てきて、足が出てきて。

その真つ黒な人影は、俺から飛び出した。

「呼ばれて飛び出てジャジャーン！ 史上最高なまでの最悪！ 絶  
対的な絶望悪！ 只今、参上！」

……………誰？

ただ黒い。どこまでも黒い。果て無い闇のようだ。

しかし、存在感は圧倒的に凄い。あの彼女の……………じゃなく、彼の  
美貌すら薄れてしまうほど……………。

それほどの圧倒的なまでの、  
闇の存在感。

全ての存在を消してしまうほどの、  
黒の存在感。

「なぜ、あなたが……………？」

風茲が闇に問う。

「ふん。理由なんてねーよ。ただの気紛れだ」

「あなただって彼の存在が……………」

「知ってるよ。そんな事くらい。今はそんな事聞いてる時じゃねー  
だろ？ 殺り合うのか、どうか。だろ？」

「イトコだったのにー！ 殴ってやるー！」

「やめなさい！ 雷！ あなたに敵うはずがありませんから、  
ここは退かせて貰いますよ？」

「いいよん。好きにしな。今日は遊びに来ただけだ」

「そうですか。それでは ああ、まーちゃん。いつかあなたの首  
は切らせて貰いますから。気長にお待ちください。 雷、行きま  
すよ」

「はい……………。じゃあ、またね。まーちゃん。バイバイー！」

「ばい……………ばい……………」

雷茲は遠ざかりながらも、手を振ってきた。

……………こっちはお前等に殺されかけたつてのに。

「よつ、まーちゃん。初めまして！。オレは、<sup>ぎん</sup>狼。職業は『一匹狼』。夜露死苦！」

手を差し伸べられ、起こされながら自己紹介された。真つ黒なマントに身を包み、更に真つ黒なフードまで被っていて、男性か女性かどうかも判断できなかった。

「よろしく……わっ！」

そのまま両腕を掴まれて、回された。

「あはは。あはは」

「……………」

状況についていけない……。

「笑えよ」

「……はい」

……怒られた。凄く怖かった……。笑うしかなかった……。

「あはは」

「は……は、は」

「もっと優雅に笑えよ」

「……すみません」

……物凄く怒られた。もっと、凄く、怖かった……。優雅に笑うしかなかった……。

「あはは」

「あはは」

何だこの状況？

両腕を掴まれて、狼を中心に振り回されている。

最早、俺は宙に浮いている。

なんだ、この展開？

「あはは」

「あ……は……は……は……」

目が回ってきた……。

「いっくよー！」

「はい？」

「せーの……。どっせーい！」

「えっ……。ええっー!?」

手を放された。てか、投げられた。当然、俺は空にぶっ飛ぶわけで。

「飛んでる。飛んでるぜー！」

地面がかなり下にあった。

「これどうしたらいいんだーっ？」

森を飛び越えていく……。

落ちる気配は無い。

「どこまで行くんだー!? 助けてくれー!!」

空に誰かがいるわけはなく。

どこまでも……。飛んで行く……。

## 第6色 迷いの森にて【到着】

……。あ、どうも。ぶん投げられた者です。

今、空を飛んでいるのですが、どうやら重力に逆らえきれなくなり、落ちかけています。と言っか、落ちてます。この高さから落ちたら確実に逝けるでしょう……。

つて、いやあー!!

まだ何もしてないのにつ！ 女の子と付き合った事も無いのにつ！  
このまま死ぬなんて……。

十代で死ぬなんて……。

いやだあー!!

誰か助けてー!!

誰かが助けてくれるわけもなく、落ちていく……。

木っ！ 木にぶつかるっ！

バキッ！ バキバキバキッ！ ドンッ！

「きゃっ！」

「おっと」

「ふあ！」

「……痛えー」

ぶ、無事だったー……。はあー、よかったー。

どうやら木の枝が上手い具合にブレーキをかけてくれたようだ。  
振り向いて木を見上げて見る。

でかつ！ 俺、こんなに大きい木よりも更に上にいたの？ 怖……。

よく生きてたなー、俺。

「ちよつと、まーちゃん！ どこに行ってたのよ!? 皆、心配したんだから……」

「まったくです。ついて来てくださって言ったじゃないですか？」

「でも、無事で何よりです。大した怪我も無さそうですし……」  
懐かしい声。聞き覚えのある声。  
漣達だった。

ほっ、と一息つき、安心している俺がいた。  
「なに落ち着いた顔してるのよ！ こっちは心配したんだからっ！  
心配したんだから……」

漣は泣きながら、顔を俯けてしまっ。

「悪かった……」

そう言い、立ち上がるうとしたが、上手く力が入らない。  
あれ？ どこか怪我したような感じはしないのだが……。

「あっ！ まー君、怪我していますよ。肘」  
そう言われ、肘を見してみる。

そこは、皮膚が裂け、赤い血が噴き出していた。  
痛っ！

傷は、認識した途端に疼きだす。

「ああっ、じっとして下さい。今、消毒しますから」  
瑠御礼さんは、どこからか靴を出してきた。どこから……。

「靴がどこから出てきたかなんてツツコミ、不要ですから……」  
怖かった……。

にっこりと笑う、その顔が怖かった……。

「まーさん。一体、どういう経緯で空から落ちてきたのですか？」  
治療中に、鎊が聞いてきた。

俺は、一部始終を伝えた。

胸を触った事は除いて。

「なるほど。女とは気付かずに胸を触った、と。否、女と気付  
きつつも胸に触った、と」

えっ？ なんで知ってるの？ それにあれは事故ですよ。僕に責  
任は一切ない事故ですよ。そうですね、皆さん？

「うわっ、最低……」

「ま、まー君……」

そんな非難がましい目はやめてくれ！ 俺のせいじゃない！ あのお姉さ……じゃなく、お兄さんが勝手に、弟……もとい、妹の胸に俺の手を……。

「ふっ。人の責任にするのですか？ 最低ですね」

「黙れ、眼鏡。お前だってそんな状況に陥れば、きつと……きつと……」

「……柔らかかったな……」。

「何か最低なこと考えていません？」

「そんなわけありませんよ」

「言葉遣い、おかしいですよ？」

「冗談はこれぐらいにしておい

て、よく生きて帰れましたね。あのクビキリキョウダイと対峙しておきながら」

「だから、なんだよそのクビキリキョウダイって？」

「この世界で有名な奴らですよ。クビキリキョウダイ その名の通りに、彼らは首を切るのです。今までの彼らの目的は、誰かを殺す事以外の目的は無いと言われています。それ程に危ない奴らなんです。危険な兄妹なんです」

ゾクッ……。

今更になって恐怖が込み上げてくる。

岩をも砕く破壊力。

首筋に添えられたナイフ。

彼等の笑み。自然な笑み。今から人を殺そうという事と関係が無いような程、自然な……。

怖かった……。

でも、それよりも、何よりも、あの黒。黒の存在感。

全てを凌駕するほどの存在感。

全てを支配するほどの圧倒的な恐怖。

その闇を見つめっていると、全てが虚しく、全てが小さく、全てが無意味に思えてくる……。

全てを呑み込むように……どこまでも暗く、果てが無い暗闇で……

…。

「君。　　君。　　まー君！」

「えっ、あつ、何？」

現実に引き戻される。

「どうしたんですか？　ぼーっとしてしまって。まだどこか痛むの  
ですか？」

瑠御礼さんが心配そうに聞いてくる。

「いえ、もう大丈夫ですよ。ありがとうございます」

「そうですか……よかった……。でも、あんな高さから落ちてきて、  
怪我がこれだけで済むなんて奇跡ですね」

「まーちゃんは、頑丈さだけが取り柄だから」

「ええ、そうなんですよ……。って、何かあまり嬉しくないな。褒め  
られたのか貶されたのか……」

「どっちでもいいわ。　　起てる？」

「ああ、大丈夫だよ。　　さあ、行こうぜ」

そう言つと、澪が腕に絡みついてくる。

「何だよ？」

「まーちゃん、またどっかにフラフラ行っちゃいそうだから、ちや  
んと捕まえとかなきゃ」

「はあ……。そうかよ……」

これまでの経験上、こういう時の澪は、どんなに断っても決して  
諦めない。断るだけ無駄。無駄な体力を使うだけだ。

「ふふーん」

鼻歌なんぞ歌いおつて……。えらく機嫌がいいな……。

「うっ、うっー……」

「ひゃ！　　ひーん……」

「……………」

この状況は何だ？

嫌じゃないけどさ……。

「きゃ！」

「ひっ！」

「……………」

「こ、これ以上力を込められると、む、胸が…………。状況説明。」

森を歩きだしてから、数分後。

瑠御礼さんが腕にしがみついていた。

澪は、ずっと俺の腕にしがみついている。

要するに今は、両手に花状態なわけで…………。

たまに、物音がすると、二人とも抱きついてきて、その時に、柔らかな感触が…………。

「すげー…………。雷茲とは違って、二人ともかなり大きい…………。」

「つて、なんか俺、変態街道爆進中、つて感じになっていないか？」

「やばい…………。それだけは、何とか回避を…………。」

「あの一…………、二人とも。そろそろ離れて…………。」

「駄目。まーちゃんはすぐどこかに行くんだから…………。」

「…………はう！ す、す、すいません！ 今、離れ…………ひゃうー！」

瑠御礼さんが、更に強くしがみついていた。

「鳥ですよ、瑠御礼さん」

「そ、そうですか…………。ほっ…………。」

「澪も、そんなにビビらなくても…………。」

「誰もビビってなんかはいないわ！ 変な事言わ…………きゃー！」

澪も更にしがみついていた。

「風だよ、澪」

「し、し、し、知ってるわよー！」

「はあ…………。仕方が無い…………。」

「鏝…………。」

「何ですか、まーさん？ 次は右ですよ」

「駄目だこいつは…………。助けにならない…………。」

「もしかして、出口までこのまま？ 本気で？」

まじでー！ これでは、俺のピュアハートは持ち堪えられない！  
羨ましいとか思っている男子諸君。この状況、結構厳しいよ？  
下手したらこれから先、ずーっと嫌われ続けるんだぞ。そんな状況  
で楽しめるわけないだろうっ！

「おや、出口のようですね」

まじで！？ 助かった！ 近くでよかった！ ずっとあのままだ  
ったら、暴走していたかもしれない……。

「もう二度と来たくない……」

「こ、怖かったです……」

そう言いながら、腕から離れていく二人。

腕から好ましい感触が消える。

……おいしい……いや、おしくない！ うん、おしくない。……う  
ん……おしくは……ない……と、思う。……うん。

「とにかく、これで終わりですね。お疲れ様でした。アクシデント  
もありましたが、楽しかったですよ」

と、鏝。

「まー君に会えたのでそれだけでもよかったです。それでは……ま  
た」

と、瑠御礼さん。

「私は何も言わないよ。いつでも会えるから……ね？」

と、漣。

「そうだな。……まあ、楽しかったよ」

と、俺。

この森を抜ければ帰れる。

お別れだ。

「それじゃあ、行こうか」

そして四人は、森の外へと歩き出す。

第6色 迷いの森にて【到着】（後書き）

最後じゃありません！ たぶん……。

## 第7色 迷った末の決意【事前】

あれ？ 森を抜けたのにそのまま？

「おかしいですね。帰れない……………」

「……………銚、どういう事だ？ 帰れるんじゃないのか？」

「ええ。そのはずだったのですが……………」

銚自身にも何が起こったのかわからないみたいだ。

「目的は達していますし……………他の可能性は……………」

銚は、またもや一人の世界へと旅立って行ってしまった……………。

こいつは、頼りになるのかならないのか……………。

はあ……………。

「どついう事なんですか？」

「さあ、俺にはさっぱり……………。こつちの世界には今日来たばかりですから……………」

「そ、そうでしたね。でも、どうしましょう？ 日も暮れてき

ましたし……………」

気が付けば、もう夕日が沈みかけていた。

森に入った時には、日はまだまだ高かったのに……………。

「あっ！」

突然、澁が声を上げた。

「ど、どうしたんだよ？」

「皆、カードを見て！」

一斉にカードを見てみる。

俺のは何ら変化が無い。

「おい、何も変わって……………」

「目的が……………」

「えっ？」

「目的が変わっています。今まではこんな事は無かった……………なのに

……」  
「どういう事だ？」

「今までは目的は一つだけだったのです。それが今回は……」  
「違う目的が出てきた……」。

「また新たな依頼が出てきた。」

「なんて書いてるんだ？」

「真実を観る」

「は？」

「真実を観る、と、僕の中には書いてあります」

「錆は言う。意図がわからないという風に。」

「瑠御礼さんは？」

「覚醒せよ、と書いてあります」

「覚醒？」

「さあ？ 何の事だか……」

「 溲は？」

「えっ？ ああ……うん……」

「言い難そうに、溲は呟く。」

「存在理由を……真実の存在理由を……思い出せ、って。 ねえ、

これって何？ どういう事？ 真実も何も、私の存在って……。 ね

えーっ！ どういう事！？ どういう……」

かなり動揺しているようだ。余裕が感じられない。何をそんなに

……。

「これってさ……」

溲が、吐きだすように、苦しそうに言葉を発する。

「これってさ……皆と……ここで……お別れて事？ ずっと一緒

だったのに……ここで……」

溲は、ずっとその事を思っていたのだ。だから、あんなに悲しそ

うな顔をしていたのか……。

どうして、俺はその事に気付いてやれなかったのだろう……。

まったく、俺は何年溲の幼馴染をやっているんだ。溲がそういう

人間だつてことは知っていたはずなのに……。

自分が嫌いになる。こういう時にこそ俺が……。

嫌な沈黙が続く……。

その沈黙を破つたのは、鏝だつた。

「その点は大丈夫でしょう。皆さんの目的がいまいち明確に書かれておりません。故に、ここは今しばらく、行動を共にした方がいいでしょう」

「そうですね。今一人にされても困りますし」

「まだ……一緒にいて……」

「当たり前でしょう？ そんな事、心配しなくてもいいですよ」

「み……皆あ……」

澪が涙を流す。

止まらずに、流れ続ける……。

「……俺もいるから」

澪に話しかける。

「俺もいるから。目的は変わらずに、澪と行動を共に、だし。俺はずっといるよ」

「あ、ありがとう……まーちゃん」

「もう泣くなよ？」

「うんっ！」

澪は泣き止み、元気よく返事をした。

その様子に思わず、笑みがこぼれてしまう。

しかし、澪が泣き止んだとはいえ……。

「これからどうする？ もう遅いし……。野宿か？」

「野宿！？ ふざけるのはやめてください、まーさん！ まったく

……野宿だなんて……」

「うおっ！ びっくりした！

ほんのちよつとした意見のつもりだったのに、ここまで反対されるとは……。

しかも、女性である澪や瑠御礼さんから反対されるのならまだし

も、男である鎊から反対されるとは……。

「とにかく、どこか人が住んでいる所を探しましょう。日が暮れるまでに」

「ああ、わかったよ」

もしかして 怖いのか？ 幽霊の存在とか信じてるのか？

でも、森の中では平然としていたよな……。

うーん、わからん。

そんな事より今は、人が住んでいる場所探さなければ……。

しかし、周りには何も無かった。

草原が広がっていて、遠くには山が見える。

人がいるような気配は無い。

だからと言って、森を今更引き返す事は出来ないだろう。

澁と瑠御礼さんの猛反対がある事は、容易に予想できる。

「あのー……」

瑠御礼さんが服を引っ張ってくる。

「どうかしましたか？」

「あれ……」

そう言い、瑠御礼さんは山の麓を指さす。

そこには、灯りがいくつも見えていた。

「あれって、人が住んでいる場所じゃないですか？」

確かにそうだろう。あれは人工的な明かりだ。

「それでは、澁さん達を呼んできますね」

しばらく歩いて行くと、灯りの正体が見えてきた。

家が、二十くらい建っている。

村というよりは、集落に近いかもしれない。

「誰かいますかー!？」

声が響く。

辺りには何も無い。

人が住んでいないように、生物が存在していないかのように、何

の音も聞こえてこない。

ただ、自分の声だけが辺りに響く……。

「……おい、誰もいないんじゃないのか？」

「しかし、灯りが点いていますから……いるとは思いますが」

その時、奥で影が動いた。

「あなた方は一体、誰ですか？」

そこには、初老の老人がいた。

髪の毛はすべてが白くなってしまっているが、背筋が伸びており、肌も健康的に黒く日焼けしているので、若く見えるが、それは見た目だけの話で、雰囲気はえらく年老いて見える。すべてを諦めたかのような目をしている。

「あのー……」

「帰ってくれ」

「はい？」

「帰れ、と言ったんだ。さっさとこの村から出て行ってくれ」

「ちょっと待ってください」

「待つことなど何も無い。話は済んだ。さあ、帰ってくれ」

「一晩だけでも構いませんので、寝泊まりできる場所を貸してください」

「貴様らに貸せる」

「まーちゃん！ ざっくん！」

澁と瑠御礼さんが走ってくる。

「駄目だったよ。誰もいない。……この人は？」

「ああ、この人は」

老人は、澁を凝視していた。まばたきを忘れてしまうほどに。そして、ハッと気付いたように、話し始めた。

「……ああ、僕は、この村の村長だ。それとさっきの話だが、小屋が一つだけ空いていたのを思い出した。そこを使えばいい」

「あ、ありがとうございます……」

口ではお礼を言うが、内心では、この態度の変わりように、いさ

さか疑念を感じる。

怪しい……。まさか！ この村長、女子高生萌えなのか！？  
だからさつきまで、穴があくほど見つめていたのか。

この変態野郎っ！

「どうしたの、まーちゃん？ 顔、真っ赤だよ？」

「早く来い、お前ら。こつちだ」

「ほら、村長さん呼んでるよ？ 早く行こ」

「ああ、しかし今の俺は、人を信用出来ないかもしれない……」

「なにバカな事を言ってるの？ 早く行くよ」

手を引つ張られる。

ああ、駄目なんだ……。

奴はお前を狙っている。

逃げないと。

奴は年下嗜好だ。

まあ、俺はどつちかって言うと、年上……じゃなく……。

……。

……俺、何を考えているんだ？

「着いた。ここだ」

目の前にあるのは、朽ちる一步手前つてぐらいのボロ小屋だった。

……えっ？ これ、人が過ごせるのか？ たった一晩とはいえ、

大丈夫か？

いやいや、せつかく貸して貰えるのだ。文句など言っではいけない。

「かなり朽ちかけているが我慢してくれ。ここしか空いているのが無いんだ。元々は馬小屋でな。広さは問題ないと思うが。あと、ここに寝袋があるから、これを使え」

馬小屋かよっ！？ いやいや、文句は言っではいけない……うん

……。でもなー、ちよつとくらいは……。

「何だ？ 文句でもあるのか？ あるなら……」

「いえいえ、滅相も御座いません」

俺は慌てて否定する。俺の内心を見抜いているのか、いないのかはわからないが、村長は、

「ふん。じゃあな」

と言い、どこかに去っていった。

「ふいー。やっと休めるよー。疲れたー」

溲は、早速小屋の中に入り込む。

「さすがに疲れましたねー。私もくたくたですうー」

そう言い、次に瑠御礼さんが入っていく。……ん？

「僕も這い入りますか。……あれ、どうかしましたか？」

「いや……。誰かがこつちを見ていたような……。気のせいかな……」

「村の人じゃないですか？ きつと僕らのような存在が珍しいのでしよう」

いや、あの視線はそんなモノじゃない。

何かと言われれば正確に答えられるわけじゃないが、あれには、負の感情が込められていた気がする。

憎、恨、怒、忌、呪、滅、殺、怨……。

それらが込められている気がして、背筋が寒くなるような、凍えるような視線だった。

嫌な予感がする……。

## 第8色 迷った末の決意【会話】

中は、思っていたよりも綺麗だった。

あくまで思っていたよりも、だが。

柱は根元が腐っているのがあるし、扉は壊れていてちゃんと閉まらないし、屋根も穴があいている。

しかし、そこから見える満月が何とも幻想的で、綺麗だった。

「今日、満月だったんだね」

いつの間にか、隣に漣が座っていた。

「ふふつ。まーちゃんが感傷に浸っているー」

「別にいいだろ。たまにはそんな気分にもなる」

「ふーん」

実際はそれどころではなく、月明かりに照らされた漣が、あまりにも綺麗に見えて、あまりにも美しく見えて……。

「どうかした？ ぼーっとしちゃって」

「い、いや、別に、何でも無い」

「本当？」

「本当」

「本当かな？」

「本当だってば！ そう言えば、温泉があるって言ってたぞ」

「本当に！？ どこ！？ どこに！？」

話を逸らす事に成功。

「慌てんなくて。俺は知らないよ。錆が村長に聞いていたから」

「ざっくん！ 温泉どこ！？」

早い……。さっきまで俺の隣にいたかと思っただら、今は錆の隣にいる。相変わらず、温泉は好きなようだ。

「ああ、それでしたら案内しますよ」

「やった。ほら、ルミちゃん。行くよ」

「えっ、あ、はい」

「いつてらしやい」

俺は眠い……。かつて無い程に眠い。

そう言えば、瑠御礼さんって、職業『委員長』だけど、委員長っぽくないなあ……。

ふぁー、……眠い。

「だーめ。まーちゃんも」

「俺は後でいい……」

「いいから、行く」

「はい……」

澪にはなぜか逆らえない。

手を引つ張られる。

って、更衣所一つしか無いじゃねーか。

「俺らは後でいいから、澪と瑠御礼さんから入ってきて」

「はい。行く、ルミちゃん」

「はい」

澪は更衣所の扉を閉める時に、お約束的な事を言った。

「覗かないでね！」

「覗くかつー！」

と、こちらもお約束的な返事を返す。

そして、鏝と扉の前に座る。すると、声が聞こえてきた。

「わー、ルミちゃん。私より胸が大きいじゃない。ちょっとだけ揉ませてよ」

「だ、だ、駄目ですって。……あっ、ちょっと……どこ触って……」

ひゃうー！

……。

……いや、俺も男だからね。

そりゃ、色々と想像してしまうわけで。

でも、これ以上聞き耳を立ててしているとますます変態扱いされそうなので、鏝に話しかけた。

「はあ……。鏝、向こうに座らないか？」

「ええ、構いませんよ」

再度座った場所は、入り口の丁度正面にある石の上だった。

一応、見張りを頼まれているのでそんなに遠くには行けない。

「それで、僕に何か話したい事でもあるのですか？」

何でもお見通しか……。

「ああ、実は」

「覗きの相談ならやめておきましょう。後が怖そうです」

「違うっ！」

「そんな事を言つて、少しは見てみたいのではありませんか？」

「ああ、ちよつとくらいは……。つて、違うっ！ 頼むから、まともな話をさせてくれ」

「まーさんの本音も聞けた事ですし。どうぞ」

だから、本音じゃ無いつてのに。まったく……。あれ、何か視線を感じるぞ。またまたそんな事言っちゃつて、的な視線を……。

はあ……。

「まあ、いいや。それより 鏝。前に、人はいないみたいなき言つてただろ。でも、ここには集落がある。つて事は、かなりの人数がいるつて事だ。どういふ事だ？ ここに住んでいる奴等全員が観察対象なわけ無いよな？」

「さすが、まーさん。なかなか鋭い事を……。確かに彼らは、観察対象ではありません。と言うより、人間ですらありませんから」

「何だつて？」

「人間ではない、と言つたのです」

「そんな……馬鹿な……さっきの村長は……」

人だった。どこからどう見ても 人間だった。

「限りなく人に近い物体、とでも言いますかね。外見は人です。更には、自我まであります。しかし、人ではない。彼らは創られた存在。我々の様に、外から来たわけではないのです。つまり、彼らは色によって創られた存在なのです。とは言つても、彼らには、

心がありますからそんなに差はありません。ただ、創造主に差があるというだけで。何かと言えば、おそらくは　ただのサンプルでしょう。いえ、これもただの憶測になるのですが。つまり、人を創るためにデータを集めており、そして彼らは、それらの　試作なのかもしれません。最終的に本物の人を創るために」

「本物？」

「ええ、彼らは、いわば絵のような存在です。歳を取る事もなければ、髪が伸びたりする事もない。それに、彼らには過去の記憶という物が無い。成長の過程という物が無いのです。つまり、この世界に誕生してからの記憶ならあるでしょうが、それ以前の記憶は無いのです」

まだ未完というわけだ。

そして、完成させる為に。

完全なる人を創る為に。

俺等からデータを採る。

何の為に？　何の為に人を創る？

「さあ、わかりません」

わかるわけがないか……。

人を創る理由なんて　わかりたくもない。

「上がったよー。気持ち良かったー。ね、ルミちゃん？」

「ええ、最高でしたよ」

鏝と話し込んでいる内に、二人が帰ってきた。

なぜか二人とも浴衣だった。

「ああ、僕が村長に話して貸して貰ったのですよ」

ナイス判断！　鏝！

俺は初めてお前を褒める！

少し濡れている髪。火照っているのか、少し紅潮している肌。

昼間の時とは違う色気があった。ていうか、セクシーすぎるぞ二人共！

浴衣パワー……恐るべし！

澪が俺の前にしゃがんでくる。

すると、石の上に座っている俺の方が視線が高くなって、視線を合わせるために視線を下げると、そこには　浴衣の陰でチラチラと見える胸の谷間があった。

「どうしたの、まーちゃん？　顔が赤いよ」

「な、な、な、なんでもござらん！」

思わず言葉使いがおかしくなってしまったが、何とか視線を外す事が出来た。

しかし、その先には　瑠御礼さんがいた。

澪と同じような格好をして。

という事は、そういう事で……。

「大丈夫ですか、まー君？」

うお！　澪より中身たっぷり！

それが止めとなり、俺は

ノックアウトした……。

## 第9色 迷った末の決意【真実】

なんだよ……これは……。

誰なんだ……あいつは？

小顔に整った鼻、薄い唇、くつきりとした二重瞼に、少し吊上った、吸い込まれそうなくらいに綺麗で大きな瞳。

よく知っている顔。

見間違っはすもない顔。

それでも

誰だか知らない。

誰だかわからない。

俺が知っているあいつは、こんな事が出来る奴じゃない。

こんな事が出来る奴は、あいつじゃない。

小顔に整った鼻、薄い唇、くつきりとした二重瞼に、少し吊上った、吸い込まれそうなくらいに綺麗で大きな瞳。

よく知っている顔。

見間違っはすもない顔。

それは 溼だった。

……いや、あれは溼なんかじゃない。溼と同じ外見をした別物だ。人ですらない、あれは。

視線の先には 溼がいる。

いや、溼じゃない何かがいる。

そして、その何かの右腕で胸の辺りを貫かれたままの村長。

その腕の先には、赤黒く、びくびくと脈を打っている物が掌の上に乗っている。

「キャハハハハハ！」

それは、高らかに嗤う。

この満月の夜に嗤い声は辺り一面に響く……。

その嗤い声は、どこか壊れているかのようで、狂っているかのよう  
うで、聞いている者に恐怖を与える。

「キャハハ！ キャハハハハ！ キャハハハハハハハ！」  
まだ嗤い続けている。

なんで？ どうして？ こんな事になってしまったんだ……。

……数時間前。

温泉から帰る途中だった。

「はあ……。俺も入りたかったぜ」

「駄目だよ、まーちゃん。温泉に入る前になぜかのぼせちゃって、  
鼻血を出しちゃったんだから」

それを言われると何も言えなくなってしまう。

二人の浴衣姿を見て鼻血が出ました。なんて言えるわけがない。  
言った瞬間、変態確定だ。

確かに、温泉に入る前にのぼせて倒れてしまうとは我ながら恥ず  
かしいと思うが、あんなものを見てしまったら……。ねえ……。

「いやー、凄く気持ち良かったですよ、まーさん」

錆が、肩にポンと手を置きながら話しかけてきた。

……。

何だろう？ この胸の奥から込み上げてくる黒い感情は？

これが殺意というものなのだろうか？

「まあ、また入ればいいですよ。朝にでも……。ね？」

瑠御礼さんが、俺の感情を感じ取ってか、にこやかな笑顔で話し  
てくる。

……。

その笑顔を見ているだけで、俺の中の黒い感情が消え去っていく  
……。

笑顔には人を癒す力がある事を俺は今確信した。

その後、俺は鼻血が出てしまい、倒れてしまった。  
その間に、鏑は一人温泉に入り、倒れる原因となった、漣と瑠御  
礼さんが介抱をしてくれた。

そして今は、あのボロ小……ではなく、あの廃屋……でもなく、  
親切な村長が我々のために貸してくださった馬小屋へと戻るところ  
である。

他愛もない会話をしていると不意に話し声が聞こえてきた。

前方に数人の人が集まっている。

「……本当……彼女……全然……」

「間違い……見た……同じ……」

「村長……俺は……」

「……俺も……恨み……」

何か話しているようだが、よく聞こえない。

「どうかしましたか？」

鏑が一步前に出て、その四人組に声をかける。

その声に反応した四人が一斉にこちらを振り向く。

「あ、あ、あんたらは……」

「ああ、温泉に入っていたのですよ。貴方達はこの村の住人ですか  
？」

「あ、ああ、そうだ……」

その四人組は鏑と会話をしつつも、しきりにこちらを見てくる。

おそらく、いや、間違いなく、この二人の浴衣姿に見蕩れている  
のであろう。

その気持ちはよくわかる。俺は被害者第一号だからな。

被害者なんて言い方は失礼だろうが、あの二人の格好は、完璧に  
凶器に値する。それ程の魅力が備わっている。

「そ、それじゃ、そろそろ私達は帰るよ」

「そうですか。それでは、おやすみなさい」

「あ、ああ……」

いそいそと四人組は帰っていく。

村長以外の村人は初めてだったが、あの四人組、最初から最後まで拳動がおかしかった。何かを隠しているかのようで。

「ふいー、戻ってきたぜ！」

小屋に戻り、その声を上げたのは、漣だった。

普段ならこんな事に声を上げるような奴ではないのだが、今日はやたらとテンションが高い。

どうかしたのだろうか？

「さて、そろそろ寝ますか？ 明日は朝早くから行きましょう」

鏝が寝袋の準備をし始める。

「まー君、これ……どうぞ……」

瑠御礼さんが寝袋を渡してくれる。

「それでは、僕は先に寝させてもらいますよ。……すーすー」

早っ！ もう寝息を立てている！

「私も、もう寝させてもらいますね。それじゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい、瑠御礼さん」

「おやすみー、ルミちゃん」

そう言い、瑠御礼さんは俺等から少し離れた所に寝袋を敷いて寝始めた。

……うん、正直に言おう。かなり離れた場所に寝袋を敷いた。言うなら、こっちの壁から向こうの壁くらいの距離。と言うか、この小屋で取る事が出来る最大の距離。

……別にいいんだけど、ここまで距離をあけられ警戒されると、信用されてないのかなー、って思っちゃったりして。

「皆、寝ちやつたね……」

あと起きているのは、俺と漣だけになるわけで。

「疲れているんだろう。かなり歩き回ったからな」

「まーちゃんは大丈夫？」

「俺？ ああ、大丈夫に決まっているだろう。あれぐらいじゃ疲れ  
ない」

「そうだよなー。まーちゃんだもんねー」

「その言い方には、貶されている感じがするな」

「そんな事無いよー。褒めてるんだって」

「ふーん」

「……………」

「……………」

言葉は途切れ、沈黙が続く…………。

もつと話したい事があるはずなのに。

もつと話してきたいのに。

「……………、まーちゃん」

澪が、突然口を開く。

「まーちゃん、私達……………帰れるよね？ 元の場所に戻るよね？」

涙を流しながら、澪は言葉を紡ぐ。

「私……………帰りたいよ……………帰りたいよお……………」

澪が大粒の涙を静かに流し、俺に心の内を訴えてくる。

澪はずつと不安に思っていたんだ。だからこそ、その不安に押し

つぶされないようにと、無理にでもはしゃいでいたんだ。不安に思

わないはずがないんだ。澪は普通の女の子なのだ。

不安にさせないようにと、俺は優しく澪に話しかける。

「大丈夫だよ。きつと帰れるさ。皆もいるし。俺はずつと一緒にい

るからさ。だから 泣くなよ？」

「……………うん」

澪は服の袖で目を拭い、こちらを向いてニコツと笑ってくる。

「えへへ、ごめんね？ 心配かけちゃって」

「気にするな。いつもの事だろう」

「うん、そうだね。 それじゃあ、私も寝るね。おやすみなさい」

そして、俺の真横に寝袋を敷き、寝始めた。

さて、俺もそろそろ寝ようかな……。

……って、寝れるわけがない。

気持ちが高まっているというか、緊張しているというか、とにかく眠れない。原因の一つはこれなんだろうが……。

横を見る。漣が静かに寝息を立ててぐっすりと眠っている。その寝顔は、あまりにも優しく……。

その目からは、雫が流れていた。  
起こさぬように、そっとそれを指で拭う。

その時、壁の穴から見える外の様子が異様に明るいの気付く。

「まーさん」

いつの間にか鎊は起きており、俺の横にいた。

「どうやら村の人達の様子ですね。何かあったのでしょうか？」

「さあな。俺等に用があるのかも知れない」

「ちよつと外を見てきますので、二人を起こしておいてください」  
「了解」

鎊は外へと出て行く。

さて、二人を起こそうかな。

「おい、起きろ」

「……すー……すー……」

まあ、予想通りだ。漣はそう簡単には起きない事を俺は知っている。  
る。

というわけで、まずは瑠御礼さんから起こすとしてよう。

「瑠御……っ！」

なんじゃこりゃー！ 可愛い、可愛いすぎる！ なんたる寝顔！

これはもう芸術作品だ！ 作品名は『天使の寝顔』。……おっと、  
こんな事をしている暇は無い。さっさと、カメラを……って、違う  
だろっ、俺！ 起こさないと……。

「瑠御礼さん！ 起きてくださいー！」

「……ふぁい？ ……まーさん……どうかしたんですかぁ？」

「少し外が騒がしいんですよ。すみませんが、ちょっとだけ起きといて貰いませんか？」

「……ええ、わかりました」

瑠御礼さんは、眠たそうな目を擦り、うーんっ、と背伸びをした。その時、薄い浴衣からならななおわかりやすい、しかも背伸びをする事によって更に強調された、決して控え目と言えない胸の膨らみに俺の視線が釘付けになってしまふ。いかにも変態みたいな感じだが、俺は男なのである！　なのである！！

「どうしました、まー君？」

「……………。えっ、あ、その……………ああ、そうだ　瑠御礼さん。頼み事があるのですが……………いいでしょうか？」

「何でしょうか？」

「溇を起こすのを手伝って貰いませんかでしょうか？」

それから二人でなんとか溇を起こす事に成功した時、

「何を言っているのですか！？　貴方達は！」

と、外から怒鳴り声が聞こえてきた。

あの声は、鏑の声……………。

何やら徒ならぬ雰囲気。

嫌な予感がする……………。

「溇、瑠御礼さん　服を着替えておいて貰いますか？　俺は外の様子を見てきます」

そう言い残し、俺は外へと出た。

そこには鏑とこの小屋を囲む大勢の村人が対峙していた。

おそらくこの村に住んでいる全員がいる。なぜなら、大人だけではなく子供までもがいた。そして、彼らの手には赤く燃えている松明と包丁、鍬などの人に向ければ間違いない凶器として使用できる道具を持っていた。それは大人子供例外なく全ての人間が……………。

「おいっ！　鏑、どうしたんだよ？　怒鳴り声なんか出して……………。それにこの人達は……………一体……………」

「ああ、まーさんですか。……彼らはですね、この小屋を燃やすと言い出したんですよ。我々が眠っている間に！」

「なっ！　なんで、何でそんな事するんだっ！？」

俺は村人を見渡す。

「おいっ！　てめー等、殺す気がっ！？　何でそんな事するんだよ！？　答えやがれ！」

やがて、群衆の中から村長が姿を現した。

「簡単な事だ……。復讐だよ、復讐……」

何の事だ？　復讐？　誰に対する？　俺等は全員、初めてここに来たはずだ。

村長は、ふんっ、と鼻を鳴らし、言葉を紡いだ。

「まあ……そんな事はどうでも良い……。　零を出せ！　さあ早く……出せっ！」

零？　誰の事だ？

村長は、俺の表情から理解できていないのがわかったのか、少し笑いながら言った。

「……そうか……知らんのか。なるほど、なるほど……。　女だ。

あの、零とかいう女を出せ。そうすれば、貴様等は逃がしてやる……」

零？　零が何かやったのか？

次の瞬間、村長が驚くべき事を口にする。

「何かやったのかという問題ではないわっ！　あいつは……あの女は

儂等の村を壊したんだ！」

## 第10色 迷った末の決意【決心】

「そうだ！ あの女は儂等の村を壊したんだ！ 完膚なきまでに壊したんだ！」

村長は肩で息をしながら、俺等に叫ぶ。

過去に起こった出来事を……。

「あれは数年前だ……。儂等は、違う場所に住んでいた。平和な日々だった。あの女が現れるまでは！」

以後は、村長の話の要約である。

ある日、彼等の村に一人の少女が現れた。その少女は、ひどく衰弱しきっていた。親切な村人達は必死に看病をし、少女は次第に次第に元気を取り戻していった……。

しかし、事件が起こる。

少女が何の前触れも無く、村人を殺したのだった。

それから目につくすべての生命を殺しまわり、存在する建物すべてを破壊してまわった。

辺りは一時間もしない内にすべてが破壊された……。

何とか逃げ延びる事が出来た人々は、新たな村を創った。あの少女の事を忘れようと、平穩に暮らそうと……。忘れる事などありえないのに……。

その少女というのが 澪 だと言う。

永遠に忘れる事がない名前。

色世界

「そうだ、忘れられるわけがない……。多少は成長しているよ。うだがそんな事ではなくなる程にこの恨みは浅くはない。おい……。小僧、想像が出来るか？ 平穩を築くために一体、どれ程の時間を費やしたと思う？ あの事件から立ち直るためにどれ程の時を失ったと思う？ もう一度村を築くのに、どれ程の時が経過したと思

う？ 一体、どれだけの命が犠牲になったと思う！？」

怒りで語尾が強くなっていく。

でも、俺には信じられなかった……。

あの溲が、溲がそんな事出来るはずがない。そう断言できる。

「そして またあの女が現れた……。またこの村が壊される……

そう思った。忘れようと努力していた事件ことがまた脳裏に浮かんでき

た……。 殺された者たちの復讐をせねば。怨みを晴らさねば……

……。そこを退けっ！ さもなくば殺すぞっ！」

「そう簡単に、はいそうですか、とはいかねえよ」

「そうか……。ならば力ずくだ……。行けえええー！」

村長がそう叫ぶと、シャベルと鶴嘴を持った村人二人が襲いかか  
つてきた。

まず最初に来た鶴嘴の方を右足で足払いをし、そのまま回転して  
即座に襲ってきたシャベルの方を回し蹴りの要領で左側頭部に蹴り  
を入れる。その後、立ち上がりかけている鶴嘴の方の鳩尾に右スト  
リートを入れる。

パチパチパチパチ……。

「おおー！ 凄いですねー、まーさん」

鏝が暢気にも拍手をしている。

「おい、お前も何かし……。」

「まーさん！ 後ろっ！」

ガンッ！

後頭部に思いがけない重い衝撃が走った。

「まーちゃん！！」

薄れゆく意識の中で、溲の姿が目に入った……。

……。俺が目を覚ました時には、そこは惨状だった。

「あっ、目を覚ましましたか？」

傍らには鎊と瑠御礼さんがいた。

「おいっ、これはどういう……痛っ！」

「まだ動いちゃ駄目ですよ。まー君は安静にしてください」

いつの間にか瑠御礼さんの太ももを枕にしていた。本当ならば、  
凄く満喫したいのだが状況がそれを許さなかった。

この状況、村長を貫いた溲らしき人物の腕……。

「説明なら僕がしましょう。貴方が気絶してから」

……

「まーちゃん！ まーちゃん！ 起きてよ、まーちゃん！」

葵月さんはまーさんに縋りつき、涙を流しながらまーさんの名を  
叫び続けている。

「葵月さん。頭を揺らしてはいけません。大丈夫です。おそら

く脳震盪ですから」

「まーちゃん……うつつ……うつつ……うつつ……」

葵月さんはまだ泣いている。

「あの女だ！ 殺せっ！ 殺せっ！ 殺せっ！ 殺せっ！」

村人が一斉に吠える。

「殺せっ！ 殺せっ！ 殺せっ！」

女子供が一斉に石を投げる。

男達は武器を握りしめる。

「瑠御礼さん、下がって下さい。危険です」

僕が一番前に立って石を防ごうとするが、多方向から投げ込まれ  
る石を防げるわけもなく、頭、肩、腹、足、体のあらゆる場所に当  
たり血が滲み出てくるのを感じられた。

それは、瑠御礼さん、葵月さん、も例外なく、唯一無事なのは気  
絶して倒れているまーさんだけだった。

一つの大きな石が飛んできた。

それは 葵月さんの頭に当たった……。

それがきっかけだったのかもしれないし、別の何かがかきっかけだ

ったのかもしれない。

葵月さんが 壊れた……。

「うつつ……うつつ……うつつ……うつつ……うふ……ふふ……ひやはは……  
……きゃはは……キヤハハハ……キヤハハハハ！」

それからは自分でもよくわからない。葵月さん……否、彼女はまーさんから手を離すとすたすたと村人たちの集まりへと歩いて行く。  
「キヤハハハハハ！ キヤハハハハハハ！」

彼女は嗤い続ける。

その様子に怖気づいたのか、村人は誰一人としてその場から動かなかった。否、動けなかった……。

「キヤハハハハハ！ キヤハハハハハハ！」

「うつつ……うつつ……」

そのまま彼女が村長の前にまで来た。

「キヤハハハハハハハハハ！」

「うづくつ！」

次の瞬間には、村長の胸を貫いていた。手には赤黒く脈打つモノが乗っている。

それは 心臓だった……。

「これが、貴方が寝ている間に起こった出来事です」

信じられない……。 澪が……。あの澪が……。

「でも、これが事実……まーさん！」

鏝の言葉が終る前に俺は駆けだしていた。

頭がふらふらし、ズキズキと痛む……。でもそんなのに構っている暇は無い！

早く速く、澪の所に行かないと……。

村長はまだ死んではいなかった。最後の抵抗に己の心臓を持つ腕

を力の限りに握っている。

「キヤハハハハ！」

その光景を見下ろし、更に彼女は嗤う……。

そして、一気に腕を引き抜き、心臓を握り潰す……。ぐちゅ、という音が辺りに響く……。

村長は遂に力尽き 絶命した……。

「キヤハ。キヤハハ。キヤハハハハハ！」

嗤う……。嗤い続ける……。子供の様に、無邪気に、悪意無く、

恐怖の嗤いを続ける。

「キヤハハハハ！ キヤハハハハハハハハハハ！ キヤハハ……」

「はあ……。やっと辿り着いた……。もう止めよう……。泣いてるじゃないか……。漣」

後ろから抱き締め、耳元にそつと呟く……。

「もう止めよう……。涙が流れているじゃないか、心を痛めているんだらう？」

「ま、まーちゃん……」

漣だった。それは、俺がよく知る漣だった。

「今だっ！ 皆、今の内に……殺せっ！」

誰かのその声で、村人達が一齐に襲い掛かってくる。

もう無理か……。そう諦めた時、目の前の空間から人が現れた。

いや、最初は人とは判断できなかった。それは夜の闇が具現化したかの様に黒かったからだ。

「呼ばれなくても飛び出てジャジャーン！ 史上最高なまでの最悪

！ 絶対的な絶望悪！ 只今、参上！」

職業『一匹狼』 狼だった。

「いやはや、えらくボロボロですねー。まーちゃん？」

気軽に話しかけてくる。この状況がわかっていないのだろうか？

「状況ならわかってるぜ！ 天下 武道会だろっ！？ これは予選か？ その割にはえらく盛り上がっているな。まさかのオレ登場で盛り上がっちゃったわけ！？ いやー、人気者はつらい！」

はあ……。一気に場の空気が変わってしまった……。村人も気を削がれたみたいだ。

そんな事を考えていると澗の呟きが聞こえてきた。

「私……知ってる。……お兄ちゃん？」

え……。お兄ちゃん？

澗の視線はこの狼に向いている。お兄ちゃん？ こいつが？ いや、いやいや、澗に兄弟はいないはずだ。じゃあ……。一体……。

その視線を受けた狼は、ふっ、と笑い、

「さあ、早くお行き。ここは危険だから……」

そう言い、俺等の前に立って逃げ道を示す。

「さあ、行けっ！」

「行くぞ！ 鏑！ 璫御礼さん！」

「わ、わかりました……」

「は、はい！」

そして、俺達は走り出す。しかし、澗は走らない。急いで戻り、手を引っ張る。

「澗！ 行くぞ！」

「で、でも、お兄ちゃんが……」

「澗！ あいつはお前の兄貴じゃない！ 行くぞ！」

「う、うん……」

俺等は村の外へと走り出す……。

「ま、待てっ！」

「おっと、ここから先は通行禁止だ。さて、どうしたものか？

村長の死体で遊ぼうか？ それとも、君達……生体で遊ぼうか？ どっちにしる最悪な死に際を覚悟しとけよ？ オレに向かってくるならな。所詮、絵如きがオレに勝てるわけもないんだから大人しくしとけば？ ……なーんて、オレがそうさせると思ったかよ？」

「はあ、はあ、はあ、はあ……。」

「こ、ここまで逃げれば大丈夫だろう……。」

「みんな、皆、い、いる、かあ？」

「と、とりあえずは、だ、大丈夫そうですね」

「はあ、はあ、はあ……。」

「……。」

「澪……大丈夫か？」

「私、殺したんだね……。」

「そう言い、澪は俯いてしまう。」

「……。」

「こついう時、何て声をかければいいかわからない……。」

「ただ、落ち込んでいる澪を見守る事しかできない。」

「沈黙が続く……。」

「それを打開するために、鏝に話しかける。」

「……鏝、これからどうする？」

「……ああ、そうですね」

「次の瞬間、更に場の空気が悪くなる言葉を見た。」

「……葵月さんとは決別しようかと思えます」

「は？ 何で？」

「まーさんは怖くはないんですか？ あんなに簡単に いくら人

ではないとはいえ人に近いモノを 殺してしまうこの人を……。」

「正直、僕は怖くて怖くて仕方がありません。いつ、自分が殺される

かわからない」

「あれは澪じゃない！」

「だとしてもです。あれが本性だろうと本性じゃなろうとそんな

のは関係無いのです。ただ怖いのです。本能が、生命としての本能

が、彼女に対して恐怖を抱いてしまったのです」

「だが、あれは……。」

「もういいよ、まーちゃん」

「澪が会話に入ってくる。」

「もういいよ。そうだよ、怖がらない方がおかしいもんね。……  
ごめんね、嫌な思いさせちゃって」

「ごめんね、再度そう謝り、また俯いてしまう。」

「いえ、こちらこそ。それではそろそろ行かせていただきます。  
では……」

鏑はどこかへと歩いて行ってしまった……。

「……瑠御礼さんはどうします？」

「……私は……彼一人だと心配なので、彼に付いて行きます」  
「……そうですか」

瑠御礼さんは鏑の後を追って走って行った。

俺と漣だけが残った……。

「まーちゃんも……」

不意に漣が話しかけてくる。

「まーちゃんも……行っていいんだよ？ 嫌でしょ？ こんな女と  
一緒にいるのなんて……。無理しなくていいんだよ？ 私から……  
離れても……いいんだよ？」

漣は言う。

痛々しい笑みを浮かべて言う。

そんな漣を今度は正面から抱きしめる。

そして、耳元に口を近づける。

ここで、俺の想いをすべて伝えたかった……。でもそれは、卑怯  
な気がして……。だから、ここでは少しだけ、ほんの少しだけ  
想いを告げる。

「俺はそばにいるから。ずっとここにいるから。手を伸ばせば触れ  
られる距離にいるから」

いつか、問われた。

『彼女の事をどう思っているか？』  
と。

それに対して俺は、

『世界が漣の敵になっても味方でいてやろうと思っ』

そう答えた。

それが今だ。今なら断言できる。

俺は澪の味方だ、と。

「うっっ……ありがとうっ……」

澪は俺の胸で静かに泣く……。

俺は、更に強く、澪を抱きしめる……。

## 第10色 迷った末の決意【決心】（後書き）

どうも、伊玖夜です。

とりあえずは終わりというわけですが、楽しんでいただけたでしょうか？

ここでは、語り部である「まーちゃん」の【迷】の物語です。状況に迷い、道に迷い、気持ちに迷う。と、そんな物語です。

作者自身も迷いに迷いましたが……。

さて、よくわからないと言う方がほとんどだと思いますが、話が纏まり次第、続編を書いていこうかなと思います。そこで謎を（謎って言うほど謎ではありませんが）明かしていこうかなと思います。とにかく、ここで区切りをつけて終わりという事で……。

最後になりましたが、最後まで読んでいただいた方に最大の感謝を。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5587c/>

---

色世界

2009年3月24日10時51分発行